

大震災を乗り越えて

亘理町立長瀨小学校

前校長 武藤 育子

1 3月11日 巨大地震・巨大津波襲来

(1) 午後2時46分 巨大地震発生

3月11日(金)、午後2時46分、巨大地震発生。一斉下校午後3時の日、欠席児童1名を除く全校児童263名が学校にいた。学校前の道路には迎いの車も数台待機していた時間帯である。

放送で1次避難の指示。恐怖の中、机の下にもぐっている児童、校庭にいてしゃがんでいる児童、次の指示を待っている。しかし、尋常ではない激しい揺れがいつまでも続き、2次避難の指示が出せない。揺れが一旦治まった時に、校庭に2次避難の指示。強い余震の中、全校児童無事に校庭に避難完了。

さっそく、毎年の訓練通り、教務主任を中心に名簿でチェックしながら迎えに来た保護者たちに児童を次々に引き渡していった。207名引き渡し。

(2) 体育館が避難所に

町の防災無線で、大津波警報発令。始めは西に3.5km離れた高台の吉田小学校を避難所に指定していたが、そのうち本校の体育館が近隣地区の避難所に指定された。第1次避難場所ということか。地区の人たちが集まり始めた。私たちも、残った児童56名を連れて体育館に避難。

体育館には役場の担当職員5名がすでに派遣され、避難所の準備を始めていた。役場の責任者を所長に、校長を副所長とし、協力して運営に当たることとし、まず、備蓄してあった毛布やマットを配布した。



(3) 大津波襲来!

午後4時頃、信じられないことが起こった。体育館の周りを津波の水が勢いよく流れてきたのである。駐車場の車は流され、ぶつかり、警笛が勝手に鳴った。遅れて避難して来た男性が流されそうになり、2人の消防団員に引っ張ってもらってようやく中に入ることができた。まさか、海岸から2km離れている長瀨小にこの勢いで津波が押し寄せるとは。瞬間に体育館の周り是一片海になった。

この時、教頭は出張先へ出向く途中、富谷町で被災し、急いで戻ってきたが、学校の周りはずすでに危険区域となり近寄れず、一晩教育委員会で過ごした。養護教諭は仙台市の通院先で被災し、やはり学校の近くまで戻ったが。津波の先端の黒い水を発見し、あわててUターンして高台まで避難したとのこと。

(4) 体育館への浸水を防げ!

そのうち、体育館のドアから水が滲み出し、浸水の危険が迫った。地震で壊れた倉庫のドアや体育用マット、跳び箱などでバリアードを築き、人々をギャラリーに避難させた。高齢者はステージである。ステージの高さは1mしかない。大勢の人が乗ったギャラリーの強度も不安であり、はらはらしたが、幸い水はそれ以上入ってこなかった。助かったのである。30分後、避難者をフロアに降ろした。

(5) 避難所の運営

日が暮れてきた。ろうそくの明かりの中で、これ



からの避難所の運営の仕方を考えた。周りが一面水に囲まれ、さらに停電と断水と寒さ、そして電話が通じないという最悪の条件の中で、避難してきた人たちの命を預かる。教職員で知恵を出し合い、役場職員と相談しながら運営をしなければならない。

避難所運営で心がけたことは、できるだけ情報を避難者に届けることであった。情報が無いということが不安になる最も大きな要因と思われたからである。とはいえ、情報は消防団と校舎から持ち出したラジオからしかなく、必要で正しい情報は少なかった。大変困難な中、避難者の秩序は守られ、落ち着いていた。地域の人々の良さが感じられた。

(6) 難しかったクレームへの対応

その中でクレームをつけてくる方が1名おられた。クレームの中で最も大きなことは「災害対策本部と連絡を取る無線はないのか。」ということであった。我々もそう思い、残念に思っていたことであった。大災害時に連絡を取り合えるシステムが必要である。

町としては、300人分の毛布とマット、10組の布団セット、10個の携帯トイレセット、ポリタンク10個、食料はなかったが、少しずつ備蓄を充実させてきたところであった。その方のクレームは避難所として必要な備蓄が足りないということで、いちいち、うなずけるものばかりであった。口調は厳しく私たちの胸に刺さったが、どうにもできないことが多く、ほとんど対応できなかった。

しかし、その方は、次の日、食料確保ボランティアを募集した際、応募し、徒歩で行ってくださった。口だけではない実行力のある方なのだと思います。

(7) 学校、役場、保育所職員の活躍

学校の職員は、懐中電灯やラジオ、筆記用具、ろうそくなど、必要な物は体育館の通路の屋根を伝っ



て校舎から持ってきてくれた。校舎の1階は水没。

また、隣の吉田保育所の職員も献身的に協力してくれた。なかでも保育所児童の貴重なおやつを小学生にも分けてくれたことは大変ありがたかった。

避難所の運営で、名簿の作成や安否確認にはフロアの地区毎の区割りが必要である。支援物資が来た場合の配布場所の設置、ポータブルトイレの設置や使い方の説明、等々、やらなければならないことはたくさんあった。

そこで、役場と学校職員の係分担を決めた。「名簿係」、「物資・水係」、「避難所管理係」、「トイレ係」「情報収集係」である。緊急の課題は水の確保である。職員が「屋上に高架水槽があるので、校舎ではまだ水が出ると思う。」と進言。さっそく男性職員たちが体育館通路の屋根を伝って、ポリタンクに水を汲んで運んでくれた。不思議にトイレは水が流せることが分かったが、いつまで使えるかが不明。使用したペーパーは流さず黒いポリ袋に入れ、小便の時は水は流さず、大便の時だけ流す。またはポータブルトイレを利用する。すぐに汚れるトイレは衛生管理が大変であった。職員たちは、自分の家族の安否も分からず不安な中、苦情も言わず、一致団結して様々な業務をこなした。

(8) 消防団の活躍、救助者の介抱

消防団の人たちが命がけで救助活動を始めており、救助されてきた人たちの介抱も職員の仕事となった。偶然、その日は、養護教諭が不在で、避難者の中に医師や看護師もいなかった。布団の用意をし、ずぶぬれで「寒い、寒い。」と言って体を震わせているお年寄りを励ましながら衣服を脱がせ、毛布を掛け、体をさすってあげた。児童の体操服は防寒着に早変わり。救助された人たちや救助に向かう消防団の人





たちの下着代わりになり、大変役立った。

(9) 地区毎の区割り…ギャラリーへの避難の間に

真夜中、消防団からもう一度10mの大津波襲来の情報が入った。誤報の疑いがあったが、情報が少ない中、最悪を想定し、行動する必要があった。また、フロアを地区ごとの区割りにする必要があったので、誤報だとしても、ギャラリーに避難させている間に区割りをすることができる。考えた末、気の毒であったが、横になって休んでいた人たちを起こし、ギャラリーとステージに誘導した。みんな落ち着いて大変協力的に行動してくれた。

大津波は来なかったが、上に避難している間に役場と学校の職員で、テープやブルーシート、ごぎを使って地区ごとの区割りをすることができた。次の日の名簿作成もスムーズにできた。

(10) 避難所の夜…職員、児童の様子

毛布が不足し、職員は数人で1枚の毛布にくるまった、アルミ製マットを体に巻きつけたりして仮眠。私は今後の避難所運営について考えて眠れなかったが、そんな中、職員は校長の体を気遣い、温かい言葉をかけてくれた。この素晴らしい職員たちと一緒にこの困難を乗り切ることができると確信した。

一緒に避難してきた児童のうち、体育館で引き渡すことができた児童もいたが、その日、父母に会えぬまま体育館で夜を過ごした児童は本当に不安であったろう。親もどんなに心配していただろう。しかし、泣いたりする子はおらず、友達と毛布にくるまって寝ていた。中にはぐっすり眠っている子もいてほほえましかった。

最も困ったことは、情報通信網の断絶である。ラジオ以外の情報が入らない。ラジオでは仙台荒浜地区の惨状を繰り返し伝えていた。亘理町はどうなっているのか。町の災害対策本部はどうなっているの

か。引き渡しをした人たちは無事に避難したのだろうか。しんと夜が更けていく。

これは夢？現実なのか？その日ほど、夜が開けるのが待ちどおしかったことはなかった。

2 次の日、3月12日 避難所移動

(1) 朝の仕事、名簿作成等

6:00、寒さの中、避難者の名簿を地区ごとに作成。425名であった。トイレやポータブルトイレの清掃が大変であり、職員は奮闘。そのうち、自宅の二階などで一晩過ごしてきた人たちが水に浸かりながら避難してきた。体育館の中は、家族や知人の安否を尋ねる声が行きかった。

(2) 体育館が浸水を免れた理由

夜が明けた。体育館の東側はまだ、一面海である。体育館のある西側の敷地は新校舎の建設予定地であり、高く土盛りがしてあった。そして、広い西校庭はグラウンドが低くなっており、巨大なプールのように津波の水を吸収してくれた。また、西側を走る東部道路は、常磐線の踏切と交差するため大きな開口部があり、津波の水を西側に逃がしてくれたのではないかと。そのため、1km先の吉田中学校は床上30cmの被害を蒙ってしまったが、本校の体育館はぎりぎり浸水を免れたものと思われる。

(3) 自分たちで行動を、情報収集部隊出動

待っていても救助隊も食料も物資も来なかった。情報も入ってこなかった。おそらく町の被害が甚大で手が回らないということだろう。こういう時は自分たちで情報を収集するしかない。役場まで約5km。職員の車はすべて流され、道路はまだ冠水しているが、まず、役場職員3名に徒歩で災害対策本部へ行ってもらうようお願いした。町の被害の情報を集め





るとともに、こちらの様子を伝え、指示をもらう。そして食料の確保もお願いした。寒さと空腹で不安な一夜を過ごした400名の人たちに力をつけなくてはならない。

3時間後、本部からの指示とパンを持って帰ってきた。おにぎりは重くて3人では無理だったこと。

(4) 本部からの指示、避難所の移動

本部からの指示は、長瀨小学校は周りが水没し、孤立しているので亘理高校へ移動するようにとの内容であった。移動の手段としては、まず、軽トラックの荷台に10人位ずつ乗り、途中、常磐線の線路をしばらく歩き、再び、冠水の少ない道を軽トラックで移動、最後に町のバスで移動というものであった。突然の移動の指示であったが、元気な人には可能であり、順次、移動を開始することになった。

吉田保育所の職員も赤ん坊をおんぶし、小さい子の手を引き、大きな荷物を持ってさっそく移動を開始した。たくましい職員たちである。年長の保育所児童も頑張って線路を歩いたのであろう。

(5) 難しい高齢者などの移動

しかし、高齢者や救助された人、障害があり介護の必要な人、妊婦などの人たちは線路を歩くことが難しく、担架やボート、そして、人的支援が必要と思われた。それがない状況では、これらの避難者が、もう一晚ここで過ごさざるを得ない可能性があり、その覚悟をした。

(6) 再派遣・避難者ボランティア

その時、所長が担架やボートを出してもらうように町に交渉してくるということで、もう一度災害対策本部へ出掛けることとなった。その際、食料確保ボランティアを募集したら、避難者の方々から男女14名応募。役場、学校職員合わせて17名で、所長とともに徒歩で出発した。

3時間後、おにぎりやバナナなど食料をたくさん持ってきてくれた。また、所長自らの交渉が実を結び、介助の必要な人たちをボートで搬送する別ルートも確保してくれた。高齢者でも歩ける人は消防団に両側を支えてもらい、線路を歩くことになった。全員が、貴重な食料を持って移動することができた。

(6) 一部職員の帰宅

この段階で、家族の安否確認のため職員を徒歩で自宅に帰すことにした。余震もあり、道路も冠水しているため、安全に注意をし、複数で行動するなど指示した。10名帰宅し、残った職員は8名である。

あとで分かったことだが、22名の職員のうち、自宅の流失、あるいは全壊、半壊の被害にあったのは7名である。幸い家族は全員無事だったが、その職員たちは、しばらく親戚の家に身を寄せたり、避難所暮らしをしたりしながら勤務したのである。

(7) 津波被害の全容に愕然・全員の移動完了

移動前に見た校舎の被害は、信じられないものであった。廊下、職員室、校長室も破壊されていた。移動途中で見た地域の光景も忘れられない。異様な力で押し曲げられた学校のフェンス。水没した家々や車。ガタガタになった道路や線路、がれきなど、寒さの中、津波の威力の跡にただ愕然とした。

夕方5時頃までに、全員、亘理高校に移動することができた。亘理高校に着いたときの発電機による照明の明るさやストーブの温かさは感動的だった。

(8) 避難者の自主的なボランティア

阪神大震災から私たちはボランティアについて学んでいる。それも、外からのボランティアだけでなく、避難者自身のボランティア。今回、食料確保ボランティア、清掃ボランティアを募集したら、快くたくさんの方たちが協力してくれた。

亘理高校でもたくさんのボランティアの方々が献身的に働いていた。トイレの水汲み、清掃、保健指導。児童の中にもボランティアをする子も出てきた。

(9) 自主的な行動の大切さ…情報確保

また、災害時、待っているだけでなく、自分たちで行動を起こすこと、情報を確保すること、徒歩で動くことの大切さを実感した。

後で聞いたら自衛隊が間違っで吉田小学校に食料を届けていたとのことであった。本部としては長瀨

小に食料が届いていたと考えていたのだろう。このような時は混乱が起きるものである。待っているだけでなく、自分たちから情報収集や食料確保に当たったのは正しかったと思われる。

3 困難を極めた児童の安否確認

(1) 3月13日(日)3日目の安否確認

亙理高校移動後は、体育館の真ん中を長瀬小本部にし、児童の安否確認を中心に仕事をするようになった。始めは電話が通じないため、出会った保護者や地域の方々聞き取り調査をしたり、徒歩で災害対策本部や避難所を回り、名簿でチェックしたりしたが、作業は困難を極めた。

3日目の朝、吉田支所に避難している人たちがいるとの情報で、担任1名と一緒に事務長の車で児童の安否確認に出かけた。支所に近づくと、道路には愛知県から派遣された消防隊がすでに配備されており、素早い支援に驚く。吉田支所では、ちょうど避難者たちが逢隈中学校を目指して線路上を移動の最中であった。6年生女子1名のみの確認ができた。また、支所前の自宅の2階に避難していたという2年男子とその家族の安否確認もできた。

夕方は、災害対策本部に行き、名簿でチェックして4名確認。この時点で安否未確認85名。

夜、亙理高校避難所で区長さんから、ヘリコプターで救助された人たちが収容されている大河原えぞこホール隣の体育館への同行を誘われた。区長さんたちも地区の人たちの安否確認をしており、児童の貴重な情報を寄せてくれていた。

真っ暗な道路を、えぞこホールを目指して走った。体育館に着いて、2家庭3人の児童の無事な姿を確認することができた。また、そのほか4人の児童の情報を得ることができた。母親から「学校から子どもを引き取って家に帰った後、家の片づけをしていた。防災無線で自分の地区の名前が呼ばれなかったから、ここまでは津波は来ないと思っていたら、突然水が押し寄せ、あわてて2階に駆け上がり、一晩過ごした。次の日ヘリコプターで救助された。」という話を聞く。このように、引き渡し後、すぐに避難をせず、家族を迎えに行ったり、家の片づけをしたりしている間に被害に遭った人たちも多かったので

ある。

防災無線でしっかりと緊急避難の声掛けをするべきであった。また、私たちが引き渡しをしたときに、初めは「吉田小学校に避難してください。」と声掛けをしていたのだが、本校が避難所に指定されてからは徹底していなかったのは大きな反省である。

(2) 3月13日(日)13:00 臨時校長会

町教育委員会からは、臨時休業や、卒業式、修了式の暫定的な日程の説明があった。また、教職員の勤務は、児童の安否確認、職員の被災状況、校地・校舎等の被害状況の確認を中心に、自宅待機も含めて、学校の実情に合わせ、各校長の裁量でお願いしたいこと、異動事務は予定通りの方針であることなどが示された。

児童生徒の避難先が多方面にわたるため、休業日や行事の日程などの保護者への通知の仕方が課題となり、校長たちからテレビ局やラジオ局の積極的な活用の要望が出された。

町内10校からは被害の状況、児童生徒の安否確認の進捗状況などが報告された。沿岸部5校に津波被害があり、被害のない学校は避難所になっていた。その時点では、ほとんどの学校は児童生徒全員の安否確認はできていなかった。

また、津波被害があった学校のうち、学校を使えない、荒浜小、長瀬小、荒浜中で3校会議を開くことになり、その後、町教委と何回か打合せを重ねた。

(3) 緊急時の校務分掌

亙理高校本部で、緊急時の校務分掌を決めた。「探索」「名簿管理」「亙理高校避難所」「吉田小避難所」「ガソリン確保」「事務」「救護」「連絡」である。

「探索係」は、被災した校舎に行って、重要書類や必要な物資を探して運んでくる係である。学校周辺はまだ津波警報も出されることが多く、危険区域となっていて許可がなければ入れなかった。ただし、泥棒も横行する中、探索は必要であった。

自衛隊の方々にも大変お世話になった。エレ





クートンや本棚など、学校で依頼したものを機動力を発揮し、迅速に運んでくれたのである。

「ガソリン確保係」も重要であった。ガソリンスタンドの情報を集め、列に並び、確保できた

ときは、亙理まで運び、職員の車に5ℓ、あるいは10ℓずつ、給油してくれた。おかげで職員一同なんとか勤務することができた。そのほか、保護者でもある自動車工場に依頼し、流されて校庭に横倒しになったままの職員の車からガソリンを抜きとってもらったり、職員の所有している船が発見されたときに、そのガソリンを分けてもらったりした。緊急時に職員、保護者総動員で自分にできることをしてもらったのである。ありがたいことである。

車がなく、ガソリン不足のなか、乗り合わせのグループを考える作業も大変だった。岩沼から自転車を使用していた職員もいたが、原発の爆発があり、正確な情報や知識がない中、通勤時の長時間にわたる無用な被曝を避けるため、車の乗り合わせにした。

教頭には、日程の決定、教職員の勤務態様、町教委への報告などを任せた。緊急時対応である。

4日目、3月14日(月) 未確認58名

(4) 3月15日(火) 自宅を対策本部に

学校を失った私たちには職員室が必要であった。そこで、3月15日(火) 電気や電話が復旧した時点で、校長の自宅を本部にしたいと教育委員会に申し出た。我が家は、ちょうど、家人が仙台の娘のところに行っていたので空き家になっていた。非常事態における特別措置ということで許可をいただいた。

我が家を本部とするものの利点の一つは、避難所と違い、大きな声で打合せや電話ができることである。また、水は風呂にたっぷり汲んであり、トイレも可能。飲み水は団地の給水車からのもので十分、ガスはプロパンで使える。電話は光電話でつながりやすい。校長にとって、車やガソリンのない中、移動が最小限で済むこともありがたい。また、被災した重要書類や物資の一時保管場所にもでき、それを乾燥させたりすることもできた。家を失った職員、

ガソリンがなくて帰宅できない職員の宿泊もできた。

団地の防災隊の人たちも学校の本部ということで支援物資を届けてくれるなど協力してくれた。地域の支援は大変心強くありがたかった。本部を基地として職員の動きも徐々にスムーズになった。

(5) 心配な避難所の児童

4月25日が始業式と決まり、24日までは長い春休みとなった。断水の中、手洗いが不十分な避難所の児童の衛生面が心配であった。亙理高校では、6名ほど下痢や嘔吐をする子が出てきて、1名は隔離された。そこで、毎朝、児童を集めて健康観察や保健指導をすることにした。

(6) 手書きの名簿作成

安否確認をしながらまず行ったことは、児童の避難先別の名簿作成である。職員のパソコンも流されているため、当分、名簿係が手書きで作成することになった。避難先が流動的で、何回も更新しなければならなかったが、重なりや落ちが無いようにし、常に最新の情報が分かるようにした。

また、本校の児童名簿にはほとんどの家庭の父母や祖父母の携帯等、緊急時の連絡先が書いてあり、大変役に立った。また、掲示用の大きな名簿もカレンダーの裏などに作成し壁に張った。

少しずつ安否確認は進んだが、一方で祖父母や母親の尊い命の犠牲の情報が入ってきた。また、安否確認の電話の向こうでツーツーという音や、無音の状態が続き、全員無事は絶望的に思われた。これは、私たちにとって大変つらい試練であった。

5日目、3月15日夜、未確認41名

6日目、3月16日夜、未確認8名

(7) 奇跡の全員無事!

しかし、保護者や職場の方々から情報をもらって、安否確認を進めた結果、なんと、7日目、奇跡的に全校児童全員無事の確認ができた。

児童は、8か所の避難所のほか、三重県や新潟県など、県外7人を始め、親戚や知人宅に避難していたのである。子どもたちの命が無事であったということは私たちに大きな力を与えてくれた。

(8) 無事だった卒業証書

校長室には大金庫、小金庫ともに倒れたままであった。許可を得て、前PTA副会長さんにバーナー



で焼き切っていた。すると、書類はほとんど汚れていたが、驚いたことに卒業証書がきれいなまま残っていた。賞状書士の資格を持つ養護教諭が書いた卒業証書である。これで無事に卒業式ができると、職員は大喜びであった。

(9) 元気な児童と保護者が一堂に

3月31日、町内一斉に卒業式、修了式、離任式を実施。会場校の互理中学校の先生方のご厚意で多目的ホールに生花も飾っていただき、厳粛な雰囲気にしつらえていただいた。久しぶりに元気な児童と保護者に会えた感動的な一日であった。晴れ着を流された卒業生は普段着で参加したが、一人一人が証書もらった時、在校生や保護者から大きな拍手をいただき、温かい雰囲気の卒業式となった。命の大切さを実感した一日となった。

4 学校再開に向けて

(1) 学校の場所の決定

学校再開の場所は吉田中学校と決まった。吉田中も床上の津波被害があったが、清掃の上、学校を再開することが決まっていた。間借りをする場合、空き教室や特別教室の利用で、何とか、小学校の学習室が確保できること、学区が同じで、児童はほとんど吉田中に進学していることなどから、苦勞している保護者の便宜を考えると、町教委の考え通り吉田中学校に間借りをするのが妥当と思われた。

(2) 保護者への連絡の手段

学校再開に向けて保護者に連絡が必要な場面が多くあった。避難所へは張り紙を出した。また、自宅に戻り始めた児童や各地に避難した児童のためには、テレビのテロップが役に立った。しかし、周知徹底させるために各家庭に個別に担任からの電話連絡が



欠かせなかった。この時期、職員の個人の電話料金は大きく跳ね上がった。

また、3月31日にほとんどの児童が登校するため、「当面のお知らせ」と「教科書・学用品等の不足調査」のプリントを配布。当面の日程、学校再開の場所等、必要な情報を保護者に届けた。

学校には、これまで以上に、先を見通して計画的に進めていく力が必要となった。

(3) 大変だった学習環境の整備

まず、中学校の職員と一緒に校舎や体育館の清掃を行った。中学生の自主的なボランティアもあり、大変な作業だったが、使用できるまでこぎつけた。

5年生以外は2クラスずつであったが、転出により児童数も減っていることから各学年1教室でTT指導をすることにした。また、資料室だった5年教室に出入り口のドアを付けてもらった。必要な教材・教具、図書の本など、被災した校舎から運び、学校としての体裁が整ってきた。だいぶ狭く不便だが、避難所になっているほかの学校に比べて校庭や体育館が使えるという恵まれた点もあった。

(4) 時間割、行事の調整

次に教務主任を中心に時間割や行事の調整を図ったが、授業時間から始め、小学校は45分、中学校は50分であり、簡単にはいかなかった。中間や期末試験中の配慮、校庭の使い方、駐車場の管理に至るまで、その都度調整が必要になった。特に、中学生が落ち着いて学習に取り組めるように児童の配慮が求められたが、幼く活発な低学年には難しく、中学校には迷惑をかけたことと思う。

(5) 新体制での学校再開準備

4月に入り、新しく校長先生を始め7人の先生方が赴任した。思いがけず被災校に赴任したため、経

験したことのない困難の連続になったのではないかと思う。新体制での学校再開準備である。

教職員は机・いす、教材・教具の準備から通学路の点検などに忙しい日々を送った。また、登校日を設けて、スムーズな学校再開に備えた。

この間、転出児童は約50名。この時期、どこの学校も学籍担当の仕事は大変だったであろう。

町内一斉に4月25日始業式、26日は入学式。間借りした中学校での学校再開である。子どもたちは慣れない環境に適応できるだろうか。先生たちの苦労が始まる。

町教委は、避難所にいる本校児童の世帯を学校に最も近い宮前仮設住宅に集めてくれた。近いとはいえ、2.5km離れた他学区にある。途中の通学路は危険箇所が多く、6月からのスクールバスの運行が軌道に乗るまでは、職員が交代で引率をした。

(6) 学校のスタッフを支える緊急学校支援員

私は3月31日で定年退職。その後、4月から7月まで緊急学校支援員として働くことになった。やり残したことが多く、何よりも先生たちが雑務に追われず、児童のために日常の教育活動が十分できるように支援したかった。

また、全国各地、世界中から、たくさんの支援物資が寄せられ、大いに助けられた。緊急学校支援員として支援物資のコーディネーターの仕事もできた。

また、1学期は、仙台教育事務所から指導主事の先生方が応援に来られ、一緒に重要書類の復旧や支援物資の事務に当たってくれた。忙しい中、大変ありがたかった。

(7) 避難訓練のあり方

私たちは、阪神大震災に学び、宮城県沖地震を警戒し、避難訓練を重ねていたが、その中に津波の訓練は入っていなかった。今後は、津波の訓練もなくてはならない。長瀬小では、学校在校中は、引き渡しをせず、屋上に避難することとしたが、今後、在宅中も含めて地域ぐるみの避難訓練が必要となる。

5 おわりに・・・反省を込めて

(1) 災害への認識

大災害時に最も重要なことは、命を預かる教職員、そして、児童生徒自身の災害に対する認識である。

正しい認識を持って迅速な避難をしたい。今後防災教育が大切になってくる。

(2) 情報通信網の断絶の改善を

また、災害時、迅速で正確な情報がなによりも必要であり、町の防災無線の整備、活用、電話各社の携帯での通話が可能なシステムの整備を早急にお願いしたい。

(3) 積極的な災害ボランティア活動を

大震災の2日後、白石の先生たちが支援物資を届けてくれた。毛布や布団、歯ブラシ、食料等である。また、その後、本やテレビなどを持ってきて、避難所に「キッズコーナー」を作ってくれた。

私たちは、その迅速な行動力に驚くとともに大いに勇気づけられた。教師として、人間として、こんな時何をしなければならぬのか学ばされた。

また、2回に亘り、全国から集まった数百人のボランティアの方々に、被災した長瀬小の泥掻きや、汚れた備品等の片づけをしていただいた。感謝、感謝である。

この時感じたのは、被害の軽い各学校の先生たちには被災地のボランティアをぜひやってほしいということである。教師として被害の実態を自分の目で見て、これからの教育に生かしてほしいと思う。被災地の視察研修、そして、教員の積極的なボランティア休暇の取得を促す必要がある。

(4) 一步一步の復興を

長瀬小は児童全員無事だったことが何よりで、復興に当たった職員、保護者、地域の人たちに大きな力を与えてくれた。一致団結した行動力でこの困難を乗り越え、学校再開にこぎつけた。

安否確認の協力してくれた母親が「みんな被災



者だから、みんなで声をかけあって頑張るからね」と力強く話してくれた言葉が忘れられない。

一步一步の力強い復興を祈る。